

『太平經鈔』戊部卷五 (5/3b/3 ~5/4b/3)

二〇二二年六月二十五日

担当 張 名揚

【原文一】

酒者水之王^(一)、水王当尅火。火者君德也。急断酒以全火德^(二)。

吾之道法、迺出以規陽、入以規陰。出以規行、入以規神。出以規衆書、入以規衆凶。出以消災、入以正身。出以規朝廷之学、其内以規入室。凡事皆使有限。努力好学者、各以其^(三)〔材〕^(三)能、反失其常法。外学〔則〕^(四)遂入浮華、不能自禁。内学〔則〕^(五)不応正路、^(六)〔返〕^(六)入大邪〔也〕^(七)。〔夫〕^(八)諸学者迺〔常〕^(九)有大病、不能自知也。其好外学、才^(一〇)〔太〕^(一〇)過者、多入浮華、令道大邪而無正文、反名〔為〕^(一一)真道、更以相欺殆也。内学才太過者、多入大邪中、自以得之也^(一二)。今古文衆多、不可勝限〔也〕^(一三)。凡学〔樂〕^(一四)得其真事〔者〕^(一五)、勿違其本也。学於師口訣者、勿違其師^(一六)〔之言〕^(一六)。是其大要〔一也〕^(一七)。

【校勘一】『太平經』卷六十九「天讖支干相配法第一百五」・卷七十「学者得失訣第一百六」

(一)『太平經』(以下「経」と略称)は「酒者水之王」の前に「天之讖格法、太陽雖為君者、反大畏太陰、水之行也。水之甘良者、酒也」という一文がある。また「酒者」の次に「経」は「水之王也、長也、漿飲之最善者也」に作り、次に「氣属坎位、在夜主偷盜賊。故從酒名為好縱、水之王長也、水王則衰太陽。真人欲樂知天讖之審実也、從太古以降、中古以来、人君好縱酒者、皆不能太平、其治反乱、其官職多戰鬥、而致盜賊、是明効也。是故太平德君方治、火精当明、不宜從太陰、令使水德王、以厭害其治也、故当断酒也」という一文がある。

(二)「経」は「急断酒以全火德」の次に「真人謹問、吾復欲都合正所写師前後諸文、使学者不得妄言、豈可聞乎。善哉、子何一日益閑習也。然」という一文あり。

(三)【才】「経」は「材」に作る。

(四)「経」に「則」がある。

(五)「経」に「則」がある。

(六)【反】「経」は「返」に作る。

(七)「経」に「也」がある。

(八)「経」に「夫」がある。

(九)「経」に「常」がある。

(一〇)【大】「経」は「太」に作る。

(一一)「経」に「為」がある。

(一二)「自以得之也」の次に「不与傍人語、反失法度而伝妄言也。今子乃疑、故復来問之。」

今為子意善惓惓、使使無慮、為其規矩。令各有限度可議、以為分界而守之也」という一文がある。

(一三) 「經」に「也」がある。

(一四) 「經」に「樂」がある。

(一五) 「經」に「者」あり。經に従う。

(一六) 【之言】「經」は「言」に作る。

(一七) 「經」に「一也」がある。

【書き下し文一】

酒は水の王^①、水の王は当に火を尅すべし。火は君の徳なり。急に酒を断じて以て火の徳を全うす。

吾の道法、迺ち出でて以て陽を規し、入りて以て陰を規す。出でて以て行ひを規し、入りて以て身を正す。出でて以て衆書を規し、入りて以て災を消し、出でて以て災を消し、入りて以て身を正す。出でて以て朝廷^③の学を規し、其の内は以て入室^④を規す。凡そ事は皆限り有らしむ。努力して学を好む者は、各々其の才能を以てし、反つて其の常法^⑤を失ふ。外学^⑥は遂に浮華に入り、自ら禁ずる能はず。内学^⑧は正路^⑨に应じず、反つて大邪^⑩に入る。諸の学者迺ち大病有りて、自ら知る能はざるなり。其の外学を好みて、才大いに過ぐる者は、多く浮華に入り、道をして大邪にして正文^⑩無からしめ、反つて真道と名づけ、更に以て相ひ欺殆するなり。内学の才太だ過ぐる者は、多く大邪の中に入り、自ら以て之を得るなり。今古の文は衆多にして、勝げて限るべからず。凡そ其の真事^⑩を学び得るは、其の本に違ふこと勿れ。師の口訣に学ぶ者は、其の師の言に違ふこと勿れ。是れ其の主要なり。

【現代語訳一】

酒は水の王、水の王は当然、火に勝つ。火は君主の徳である。急いで飲酒をやめ、それによって火の徳を保全する。

私の道法は、ほかならぬ(天に)出て陽を正し、(地に)入って陰を正す。(体外に)出て行いを正し、(体内に)入って神を正す。(天に)出て諸々の書を正し、(地に)入って諸々の図を正す。(体外に)出て災を消し、(体内に)入って身を正す。(表に)出て天子の学問(経学)を正し、裏ではそのさらなる深い学問(讖緯学)を正す。(この道法は、)すべての物事に限度があるようにさせる。努力して学ぶことを好む者たちは、それぞれの才能を発揮することに よって、逆に(聖人が製作した)あるべき定則を失ってしまう。外学(経学)はこうして表面上のものになり、自然に(この傾向を)止めることができなくなってしまふ。内学(讖緯の学)は正しい道に应えず、逆に大邪のほうに入ってしまう。諸々の学ぶ者はそこで大病を患い、自らそれを察知することができない。外学を好んで才能がありすぎる者は、多くは表面上のものになり、道を大邪にして(天地万物の根本となる)正文がないようにさ

せるにもかかわらず、(大邪を) 真道と名付け、さらにそれによって互いに欺きあうのである。内学についても、才能のありすぎる者は、多くは大邪のほうに入り、自らこのような事態を招くのである。古から現在までの文書は、数が多く限りがない。(偽りのない) 真実の事柄を習得した者はすべて、その真実の根本に背いてはならない。師の口訣に学ぶ者は、師の言に背いてはならない。これは大切な要点である。

【語釈一】

①水之王

「經」卷六九「天讖支干相配法第一百五」

夫市者、迺水之行也。故四方人民凡物、悉■(■||水十不。「流」の異体字) 而往聚処。是故江海、亦水之王長也。故凡百川財物、亦流往聚処也。夫水者、北方玄武之行也、故貪、數劫奪人財物。夫市亦五方流聚而相賈利、致盜賊狡猾之属、皆起於市、以水主坎。天之法、以類遙相應、故市迺為水行。縱其酒、大与之、復名為水王。市人亦得酒而喜王、名為二水重王。其咎六。厭衰太陽之火氣、使君治衰、反致詆臣。

②圖書

『後漢書』卷二八桓譚伝

蓋天道性命、聖人所難言也。自子貢以下、不得而聞、況後世淺儒、能通之乎。今諸巧慧小才、伎數之人、增益圖書、矯稱讖記。

李賢注「圖書即讖緯符命之類也。」

③朝廷

『後漢書』卷一四劉興、伝

朝廷設問寡人。

李賢注「朝廷謂天子也。」

④入室

『論語』先進

子曰、由也升堂矣、未入於室也。

⑤常法

「經」卷五〇「去浮華訣第七十二」

是以聖人欲得天道之心意、以調定陰陽、而安王者、使天下平、群神遍悦喜。故取衆賢采貫中而制以為常法、万世不可易也。

⑥外学

『資治通鑑』卷五二「孝順皇帝・永和二年」

冬十月甲申、上行幸長安。扶風田弱薦同郡法真博通内外学。

胡三省注「東都諸儒以七緯為内学、六經為外学。」

⑦外学遂入浮華

『太平經鈔』癸部「神人真人聖人賢人自占可行是与非法」

外学多、内学少、外事日興、内事日衰、故人多病、故多浮華。浮者、表也。華者、末也。

⑧内学

『後漢書』卷八二方術伝

桓譚、尹敏以乖忤淪敗、自是習為内学、尚奇文、貴異数、不乏於時矣。

李賢注「内学謂凶讖之書也。其事秘密、故称内。」

⑨正路

『孟子』離婁上

仁、人之安宅也。義人之正路也。

「經」卷五〇「去浮華訣第七十二」

天地之性、非聖人不能独談通天意也。故使說、内則不能究於天心、出則不能解天文明地理、以占覆則不中、神靈不為其使、失其正路、遂從惑乱、故曰就浮華、不得共根基至意、過在此、令使樸者失其本也。

⑩大邪

「經」卷七一「致善除邪令人受道戒文第一百八」

於人心中有惡意、使大邪來欺、人能堅閉耳、不聽其辭語、則吉矣。聽其辭、則凶害矣。

『太平經鈔』辛部

而至此、皆有大邪神鬼、不欲人度世、善惑人致怠、退而自言變怪、真偽相雜。

⑪正文

「經」卷五一「校文邪正法第七十八」

正文者、迺本天地心、守理元氣。

「經」卷九六「守一入室知神戒第一百五十二」

夫正文正辭、乃為天地人万物之正本根也。是故上古大聖賢案正文正辭而行者、天地為其正、三光為其正、四時五行乃為其正、人民凡物為其正。是則正文正辭、乃為天地人民万物之正根大効也。

⑫真事

『太平經鈔』辛部

天使悉斷邪偽凶惡、而出真事。凡凶画各有精神、真事有真神、邪事有邪神、善事有善精神、惡事有惡精神。

【原文二】

夫学之大害〔也〕^(一)、合於外章句者、日浮淺而致文而妄語也。入内文合於凶讖者、实不能深得其結要意、反誤言也^(二)。凡〔事〕〔書〕^(三)為天譚^(四)、十十相応者是也。十九相応者小邪〔也〕〔矣〕^(五)。十八相応者小乱矣。過此而下〔非真〕^(六)、不可用也。名〔為〕^(七)乱天文〔地理〕^(八)、陰陽不喜、万物戰鬥、人民被〔其〕^(九)大咎也。〔思〕^(一〇)養性法、内見形容〔照〕〔昭〕^(一一)然者、是也。外見万物衆精〔神〕^(一二)者、非也。〔学〕^(一三)凡事〔者〕^(一四)常守

本文、而求衆賢說以安之者、是也。〔守〕^(二五) 衆文章句而忘本事者、非也。

【校勘二】『太平經』卷七十「學者得失訣第一百六」

(一) 「經」に「也」がある。

(二) 「反誤言也」の次に「經」には「學長生而出、合於浮華者、反以相欺也。合於內不得要意、反陷於大邪也。今子來反復問之、故為子陳其文、見其限也。合其法度者、是也、不合者、非也、明矣。可以是知之也」という一文がある。

(三) 【事】「經」は「書」に作る。「經」に従う。

(四) 【譚】「經」は「談」に作る。

(五) 【也】「經」は「矣」に作る。

(六) 「經」に「非真」がある。

(七) 「經」に「為」がある。

(八) 「經」に「地理」がある。

(九) 「經」に「其」がある。

(一〇) 「經」に「思」がある。

(一一) 【照】「經」は「昭」に作る。

(一二) 「經」に「神」がある。

(一三) 「經」に「学」がある。

(一四) 「經」に「者」がある。

(一五) 「經」に「守」がある。「經」に従う。

【書き下し文二】

夫れ学の要害は、外の章句^①に合ふ者、日に浮浅にして文を致し、妄語するなり。内文に入り凶讖に合ふ者、実は深く其の結^②要の意を得ること能はず、反つて言を誤れり。凡そ書は天譚を為し、十の十相ひ応ずる者は是なり。十の九相ひ応ずる者は小邪なり。十の八相ひ応ずる者は小乱なり。此れに過ぎて下なるは、用ふべからざるなり。名は天文^③を乱し、陰陽喜ばず、万物戰鬥^④し、人民大咎を被るなり。養性の法、内に形容の照然たるを見るは、是なり。外に万物衆精を見るは、非なり。凡そ事は常に本文^⑤を守りて、衆賢の説を求めて以て之に安んずるは、是なり。衆文の章句を守りて本事^⑥を忘るるは、非なり。

【現代語訳二】

そもそも学の要害は、経学の章句に合わせる者が、日増しに浅薄になって文章を作り、妄りに話すことである。讖緯の学に深入りし、讖緯の書(の内容)に合致する者は、実はその要を体得することができず、逆にその言葉を誤解してしまう。すべての書は天の言葉を反映するものであり、(天の言葉の)全部と合致するものは正しい。十分の九と合致するものはやや邪になる。十分の八と合致するものはやや乱れる。これより以下は採用してはいけない。

その書名だけでも自然現象を乱し、陰陽は喜ばず、万物は争い、人民は大きい被害を受けることになる。養性の法は、体内の状態がはっきりと見えるのが正しい。体外に万物や多くの精怪が見えるのは正しくない。すべての物事は常に本文を守ったうえで、多くの賢人の説を求めてそれに安住するのが、正しい。多く経文の章句を守り、根本を忘れるのは、正しくない。

【語釈二】

①章句

『後漢書』卷四四徐防伝

漢承乱秦、經典廢絶、本文略存、或無章句。

「経」卷四〇「分解本末法第五十三」

故治乱者由太多端、不得天之心、当還反其本根。夫人言太多而不見是者、当還反其本要也、迺其言事可立也。故一言而成者、其本文也。再転言而止者、迺成章句也。故三言而止、反成解難也、将遠真、故有解難也。四言而止、反成文辞也。五言而止、反成偽也。六言而止、反成欺也。七言而止、反成破也。八言而止、反成離散遠道、遠復遠也。九言而止、反成大乱也。十言而止、反成滅毀也。故経至十而改、更相伝而敗毀也。夫凡事毀者当反本、故反守一以為元初。

「経」卷五一「校文邪正法第七十八」

古者聖書時出、考元正字、道転相因、微言解、皆元氣要也。再転者、密辞也。三転成章句也。四転成浮華。五転者、分別異意、各司其忤。六転者、成相欺文。章句者、尚小儀其本也、過此下者、大病也。乃使天道失路、帝王久愁苦、不能深得其理。正此也。

②結

『管子』樞言

誠信者、天下之結也。

③天文

「経」卷三七「五事解承負法第四十八」

是以古者聖人将有可為作、皆仰占天文、俯視地理、明其反本之明効也。

「経」卷九一「拘校三古文法第一百三十二」

天文聖人之辞、尚迺有短長。

④戰鬥

「経」卷九一「拘校三古文法第一百三十二」

夫邪言邪文以説経道也、則乱道経書。道経乱、則天文地理乱矣。天文地理乱、則天地病矣。故使三光風雨四時五行、戰鬥無常、歳為其凶年。

「経」卷九六「守一入室知神戒第一百五十二」

下古之人所以久失天心、使天地常悒悒者、君乃用单言孤乱、核事其不実、甚失其意明矣。真人但以此上、乃使天下衆賢共考辞文而不知、皆為誤学、故生災異不絶、天甚疾之、得乱生病

焉、陰陽戰鬥而不止也。

⑤ 本文

「經」卷四〇「分解本末法第五十三」

故一言而成者、其本文也。再轉言而止者、迺成章句也。

「經」卷五〇「去浮華訣第七十二」

今所以失天道意者、夫賢者一人之言、知適達一面、明不尽暗、不能用流六方、洽究達内外七处、未能源万物之精、故各異說、令使天書失本文、乱迷惑者、正此也。

※ 天書

「經」卷五〇「天文記訣第七十三」

天地有常法、不失銖分也。遠近悉以同象、氣類相應、万不失一。名為天文記、名曰天書。

「經」卷九八「男女反形訣第一百五十九」

願復請問一疑事言之。天師前所賜子愚生書本文、有男女反形、願聞其意。

⑥ 本事

「經」卷五一「校文邪正法第七十八」

拘校上古中古下古之文、以類召之、合相從、執本者一人、自各有本事、凡書文各自有家屬、令使凡人各出其材、困而共說之、其本事字情實、且悉自出、收聚其中要言、以為其解、謂之為章句、得真道心矣。